

C'n

vol.26

SCENE
NEWS

CHIBA CITY MUSEUM OF ART



斎藤義重展

The Retrospective Exhibition of
SAITO YOSHISHIGE

千葉市美術館にて《Black Boxes》(1995:本館蔵)を展示する
斎藤義重,1995年(撮影:ノマディク工房 内田芳孝)

日本美術と四季の自然



歌川広重《阿波鳴門之風景》1857年 ホノルル美術館蔵

ずかされました。季節の推移が何段階にも石段を上り下がりするように変わる日本の自然とそれに合わせた生活風俗が、地球の裏側のオーストラリアの人たちにはたしてどのように受けとめられるか、シンポジウムも開かれるとのことで私もそれに参加し、率直な意見を聞いてこようと思っています。

毎朝の日課になっているのですが、今日も近くの公園で行われているラジオ体操の集まりに参加してきました。遅咲きの八重桜が風に散る中で、藤棚の藤のいまだ幼い花房がやさしく揺れ、ツツジの生け垣が何色もの花をはなやかに競い咲かせていました。春は遅くなりましたが、夏の到来は

まだまだ先の、過ぎよいいこのごろです。

さて、新年度の特別展第一弾「浮世絵風景画名品展」が終わると間もなく、現代日本美術の巨匠、斎藤義重氏の偉大な足跡をたどる回顧展が開催されます。

斎藤氏は、一昨年、平成13年の6月に97歳で亡くなっていますので、会期中に早くも三周忌を迎えることになります。既にご存命中から戦後日本美術の指導的な存在として高く評価されていた氏の、造形思考の展開が一望できる、画期的な展覧になるはずですが、企画担当の学芸員は、「回顧するだけでは斎藤氏の遺志は受け継がれない。一般の美術愛好家の皆様はもとより、アートを目指す若い人々にぜひ会場に足を運んでもらいたい」と、熱いメッセージを発しています。

まことにその通りで、現代美術の発信をもその重要な使命の一つとしている我が館は、芸術の、そして日本文化の未来を切り拓こうとする若者たちの来場を心から歓迎するものです。過去の優れた遺産は、今日の創造の種火となり、明日の可能性を新たに拓く行為へとつなげていかなければなりません。

美術館が真に刺激的な場として機能し続けるために、現代美術の展覧も継続的に企画していく所存です。引き続き、皆様のご理解とご支援をお願い申し上げます。

館長 小林 忠



斎藤義重《複合体 101》1983年 千葉市美術館蔵

今年の桜は、例になくしづとく、いつまでも枝にしがみついてくれました。満開を直前にした3月の末から4月の初めにかけて、寒い日が続いたためでしょうか、春の特別展「ホノルル美術館所蔵 浮世絵風景画名品展」の開会式が行われる頃まで、幸いに健在でした。おかげで、300点もの浮世絵版画とともにほるばるやってきて下さったホノルル美術館の学芸員にも、日本の桜を満喫していただくことができました。その方は日系4世のアメリカ人で、曾祖父、曾祖母の母国に帰って、おそらくは家に誇らしく言い伝えられていたことと思われる花の盛りのみごとさを、はじめて実感されたのではないのでしょうか。

浮世絵風景画では、しばしば雪月花のシリーズが生まれています。たとえば北斎には、雪の「隅田」、月の「淀川」、花の「吉野」を描いた諸国名所の3図連作がありますし、広重では三枚続きの大作セット(雪「木曾路之山川」・月「武陽金沢八勝夜景」・花「阿波鳴門之風景」)が有名です。今回の展覧会では、これらの内、花の「吉野」図のみが見られませんでした。あとのすべてが会場に並びました。まことにホノルル美術館の浮世絵風景画コレクションは豊かで、しかも質高いものと、あらためて驚かされたものです。周囲の人たちに私は、「今度のこの特別展を見逃したら、今後浮世絵の風景画について語れなくなれますよ」とおどし文句を投げかけたものですが、冗談まじりではあったものの、少しは本音も入っていたのです。

もとより、雪月花の、雪はもちろん冬を、月は秋(まれに夏)そして花は桜で春の季節を、それぞれ代表する景物であるわけです。日本の自然と人々の生活は、季節に特有の表情と詩情をともなって表現されることにより、よりいっそう味わい深くなるもののようなのです。

今年の8月半ばから、オーストラリアのシドニーにある国立ニュー・サウス・ウェイルズ美術館で、「四季」をテーマにした日本美術展が開催されます。同館で活躍している日本人学芸員の企画によるこの意欲的な展覧には、かつて「祝福された四季 近世日本絵画の諸相」展を開催した千葉市美術館も私個人も、陰に陽に協力し、応援してきました。どこが意欲的かといえますと、同館のケイボン館長の弁では、「四季の移ろいがなく、夏から冬に、冬から夏へと急激に気候が変わるオーストラリアで、季節の微妙な変化を形に表す日本の美術が、人々にどのように鑑賞されるか、興味深い実験です」とのこと、なるほどとうな

齋藤義重展について



千葉市美術館にて〈Black Boxes〉(1995:本館蔵)を展示する齋藤義重,1995年(撮影:ノマディック工房 内田芳孝)

今回、千葉市美術館で開催される齋藤義重(1904-2001)の展覧会は、図らずも作者没後はじめての回顧展となった。1930年代に作品の制作を開始した齋藤は死の年まで制作を重ね、その歩みは70年ちかいものであり、生前からこの国における現代美術のパイオニアとして絶えず新しい表現領域を志向する稀有なアーティストとして評価されていた。ここでは、本展覧会までの経緯と方針について簡単に記しておきたい。

展覧会そのものは、齋藤の生前から岩手県立美術館・鳥根県立美術館・熊本市現代美術館(当時はまだ準備室)の3館で作家を中心にした打ち合わせが進められていた作業が出発点となっている。この段階で当館は参加していなかった。2000年ごろのことだが、この3館とは別箇に当館では生誕100年に当たる04年ごろをめどに個展ができないかということを考え、作家の取扱い画廊に打診をした。その時には既に、展覧会の企画が進行中ということで見送らざるを得なかった。事態が変わったのは2001年6月、齋藤が没して以後である。前述の3館の展覧会を巡回させる日程の調整の結果、他の美術館も参加できるようになり、当館と富山県立近代美術館が加わることになった。この時点で、企画がリセットされたと言える。

おそらく、齋藤が生きていれば今回の展覧会は新作を核とした展示構成となり、過去の作品はそれに付随して「作家の今日

までのあゆみ」を物語るための役割を担っていたと思う。彼の没後、5館の担当者たちが何回か顔を合わせて会議を行い、最終的に落ち着いた展覧会の形態は結局のところ、特定の時代に偏ることなく現存する作品を展示・紹介する回顧展ということになった。それは、齋藤の作品をニュートラルな状態の下に理解し、素のままのデータとして公開することを目指した、という真つ当と云うよりはしごく当然な態度に立ち返ることだった。これは、固定的な風景観に従って風景画を描くのではなく、距離を測量して地図を制作する作業に似ている。

それでも、「現代美術のパイオニア」という惹句から逃れることは難しかった。展覧会の構成が決定される経緯で、齋藤の作品のほかに、彼がその出発において影響を受けたとされる1920年代のロシア=アヴァンギャルド(あるいはロシア未来派)の作品を併陳するという案が出されたことはその端的なあらわれである。しかし、すでにこれらの動向の紹介については、1996年に西宮市大谷記念美術館で開催された『美術の考古学 第2部「未来派の父」露国画伯来朝記!! -ブルリユークと日本の未来派-』といった詳細な調査に基づく展覧会がすでに行われており、一体誰の作品をどのように展示するかという問題があった。加えて、45年以前に制作されたであろうと推測される齋藤の作品は戦災のために1点しか確認されていない(それも、1999年



齋藤義重《断片》2001年

に神奈川県立近代美術館で開催された個展のうちに初めて公開されたものである)。それ以上に重要なことは、50年代末以降齋藤について第三者が記す齋藤論で必ずといっていいほど言及されている彼の作品におけるロシア=アヴァンギャルド、もしくはそれに続く村山知義(1901-77)の関連ないし影響というものは本人の回想に基づくものであり、作品から検証されたものとは言い難い点である。このことと関連して、作品を制作する上で足がかりとなるであろう彼の造形思考にかんする自らの発言から、それらの影響を読み取ることができるかと言えば、こちらにも疑問が残る。これでは、できるだけ現存する作品に沿って齋藤義重というアーティストを捉えようとするためには足かせになりこそすれ、作品理解の助けとはならない。

こうした歪みを是正するためには、できるだけ情報を一箇所(この場合は展覧会図録)に集積させ、その荷重によって発生する事象-これは、豆腐を積み上げたピラミッドが自壊するさまを想像していただければよい-によって検証する方法が最も手っ取り早い。この方法を精緻に行えば、対象となる人物が仮に韜晦を行っていたとしても、韜晦しようとする論理すら観察することも、ある程度は可能となる。だから今回は作品の展示だけでなく、齋藤が制作した代表的な作品の図像と主要な文献のリストを目録として図録に掲載することが主要な作業となった。とは言え、作者の手許に遺された書簡や手稿類の調査という物故作家の研究にとって必須の作業を行うことがなく、公刊された資料・文献(の整理)に全面的に依拠しなければならなかったことに象徴されるように、展覧

会の開催は作者歿後であっても、私たちの作業手続きは作者本人が生きている時と変わりがなかった部分が多かった。これは作家研究の大きな過渡期に私たちが位置してしまったからであって、さきの喩えを用いるならば、私たちが測定した地図と称するものの精密さ、その実態は残念ながら、まだ伊能図以前ではない。

展覧会のための調査を本格的に行うようになったのは2002年になってからのことである。作品についての調査・整理には時間が余りにも少な過ぎた。1930年代なかばから45年ごろにかけて制作されていた作品の写真が現在知られているもの以外に存在するかどうかの探索や、60年代に制作されたドリルを用いた大量の作品について展覧会出品歴を確定させることなど、調査の課題をあげればきりがない。私たちがある程度齋藤の制作のあゆみを図録に反映させることができたとすれば、取扱画廊から提供されたデータはもちろんのこと、78年に東京国立近代美術館で開催された個展と84年に東京都美術館をはじめとする全国5館で巡回された個展をはじめとする、私たちに先立って齋藤展を行ってきた各美術館の担当者をはじめとする全国の学芸員の調査が蓄積されていたおかげである。

実際に開催される展覧会の展示構成も、会場の制約内で上述のような客観性に基づいてできるだけ心がけたが、どうしても問題となる時期があった。それが1980年代以降の立体作品群である。

生前の齋藤は、立体作品を個別なものとしては取り扱っておらず、それらを断片と見做しており、彼はその断片を適宜組み合わせさせて依頼された展覧会に臨んでいた。展覧会でひとつの空間(これが実際の三次元の空間なのか、それとも作者の観念が投影されたものであったのかについてはさまざまな解釈がある)を創出する作品の集合体、その構成要素となるひとつひとつの作品の制作時期には大きいときで10年ちかいズレがあった。断片を、断片のままとして受入れ、制作順に展示することも考えられないわけではなかったが、今回は生前彼が行った展示の記録を踏まえて、ひとつの試案として展示室を構成してみた。これは、人により議論が分かれるところだろう。

(本館学芸員：粟科英也)



齋藤義重《Seisaku ing》1985年 千葉市美術館蔵 撮影：山本双六

齋藤義重展

The Retrospective Exhibition of SAITO YOSHISHIGE

2003(平成15)年5月17日(土) - 6月29日(日)

10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで(入館受付は閉館の30分前まで)

【休館日】 毎週月曜日

【入館料】 一般800(640)円

大学・高校生560(450)円

中・小学生 240 (200)円

()内は団体30人以上の料金

【主催】 千葉市美術館

【企画】 齋藤義重展実行委員会

【協力】 株式会社まつもと

【シンポジウム】

「齋藤義重、その造形を求めて」

5月24日(土) 午後2時より 入場無料先着150名様

千葉市美術館・11階講堂

講師： 中原佑介(美術評論家)

峯村敏明(美術評論家・多摩美術大学教授)

建畠 哲(美術評論家・多摩美術大学教授)



齋藤義重《やじるべえ》1973年 高松市美術館蔵

報告 プロジェクトをつくる - 千葉アートネットワークにむけて 公開討論会

【討論参加者】

千葉大学教授 長田謙一

在宅ケア市民ネットワークメンバー

千葉大学学生院生ケミプロメンバー

千葉市美術館 浅野秀剛 半田滋男

まちづくりサポートセンターメンバー

千葉市立小中学校教諭

検見川商工会議所



去る2003年3月29日(土)千葉市美術館講堂において、「千葉アートネットワークにむけて」と題する、公開討論会が行われました。社会と共にアートも大きく動き、変容し続けていますが、さまざまな立場・環境にある人々が、アートとの関わりを考える講座でした。

千葉市美術館と千葉大学、NPOや市内の小・中学校そしていろいろな地域の人々が集い活動するプロジェクトでもあります。この日は、千葉大学の長田謙一教授による「アートと市民のネットワーク」という基調スピーチの他、千葉市美術館、千葉大学の学生、NPOの千葉まちづくりサポートセンターと千葉・在宅ケア市民ネットワークピュアのメンバー、市内小中学校の先生、検見川商工振興会の方々による報告の後、全体の討論となりました。初めて会う人が多く、時間も限定されていたせいか、期待していた聴衆を巻き込んだ活発な討論には至りませんでした。(a)

討論会の様子 於:千葉市美術館講堂

2003年アートの旅



宮島達男《地の天》1996年

当館スタッフと千葉大生とが手を組み、知恵をしばって展開する、小中学生対象の夏休み企画。現代美術の名品を集め、「旅するアート」をテーマに構成します。めくるめく時空の旅へと誘う作品、自分の心を探検してみたい作品、そして美術館をぬけだして旅するアートたちは...!? 驚きと発見がいっぱいの空間に、えうご期待!



白髪一雄《陽華公主》1964年

2003年アートの旅

2003(平成15)年 7月8日(火)-9月15日(月・祝)
 10:00-18:00 金曜日は20:00まで(入館受付は閉館の30分前まで)
【休館日】 毎週月曜日、但し7月21日開館(月・祝)、翌22日(火)休館
 9月15日開館(月・祝)
【入館料】 一般200(160)円
 大学・高校生150(120)円
 中・小学生無料
 ()内は団体30人以上の料金

夢二・深水と大正の女たち

大正期(1912-26)の美術を通観する時、それらが僅か15年程の間に生み出されたとはにわかに実感できないほど、多様で豊かな表現が行われていることに驚かされます。とりわけ個性的であることが好まれ、伝統を重く受け止める一方で、既成の様式にとらわれない新しい感覚が集中して表出された点で、大変ユニークな展開のあった時代でもあります。平成15年目の現在、その時間感覚を共有する我々の眼に、大正期の表現はどのような密度をもって映るのでしょうか。



竹久夢二《宝船》大正9(1920)年 木版



伊東深水《対鏡》大正5(1916)年 木版

今回は大正期の女性像に焦点を絞り、時代の息吹に活性化した表現の多様性をご覧いただけます。大正口マンを代表する個性派竹久夢二(1884-1934)と、浮世絵以来の伝統木版を新時代にふさわしい鮮烈な美人画として発表した伊東深水(1898-1972)の作品を中心に、橋口五葉(1881-1921)、横尾芳月(1897-1990)など、同時期に活躍した作家の作品を通して、この時代の豊潤な女性表現の魅力を探ります。

夢二・深水と大正の女たち

2003(平成15)年 7月8日(火)-8月10日(日)
 10:00-18:00 金曜日は20:00まで(入館受付は閉館の30分前まで)
【休館日】 毎週月曜日、但し7月21日開館(月・祝)、翌22日(火)休館
【入館料】 一般200(160)円
 大学・高校生150(120)円
 中・小学生無料
 ()内は団体30人以上の料金

学びふれあい支援 小学校・中学校・高等学校の先生方へ



院内小学校の子どもたちと、当館学芸員

子供たちへの美術鑑賞教育、あるいは体験的・総合的な学習の場として、是非美術館をご利用ください。千葉市美術館では図工・美術教育のお手伝いを積極的に行っております。

市内の小・中学生については、土曜日であれば「ふれあいパスポート」または「学生証」の提示により入館料は無料、平日は教育を目的として先生の引率がある場合、先生を含めて無料とさせていただきます。

また市内高等学校の美術教育につきましても割引などの制度がございますのでお問い合わせください。

内容の詳細は美術館教育普及担当(tel.043-221-2314/fax043-221-2316)までご相談ください。

展覧会のご案内

展覧会名、会期等は変更されることがあります。

大原美術館所蔵名品展

Masterpieces from Ohara Museum of Art

8月19日(火)-9月28日(日)



1930年の開館以来、国内外の優れた美術品の収集で知られる大原美術館は、多くの人々に愛されています。今回は、一般にもなじみ深いルノワール、マティスをはじめとする西洋近代美術と、梅原龍三郎、安井曾太郎ら同館屈指の近代日本洋画の名作を紹介します。

ルノワール《泉による女》1914年
大原美術館蔵

ダン・グレアム展

Dan Graham

12月2日(火)-2月1日(日)

ガラス、鏡、ハーフミラーを複雑に組み合わせたパヴィリオンで、近年、世界的に注目を集めるダン・グレアム。本展は、初期のコンセプチュアル作品から近作まで、このアメリカ人作家の全貌を回顧します。

ダン・グレアム
《Triangular solid with Circular Inserts (Variation E)》1997年
千葉市美術館蔵



天津市芸術博物館展

Treasures of Tianjin Art Museum

10月11日(土)-11月24日(月・祝)



天津は北京、上海に次ぐ中国第3の都市で、千葉市の友好都市です。両市の友好関係を更に深め、両市民が文化を理解しあうことを願い、天津市芸術博物館所蔵の中国全土の歴代芸術と天津地方の民間芸術を紹介します。

《翡翠キリギリス白菜》中国清時代
天津市芸術博物館蔵

逝きし芸術家を偲んで /新収蔵作品展

2月7日(火)-2月29日(日)

日本の戦後美術を形成した多くのアーティストのかたがたが、近年相次いでお亡くなりになりました。本展では、当館所蔵作品のなかからそれらのかたがたの代表的作品を展示、業績を回顧するものです。あわせて、昨年度の新収蔵作品も展示します。

川端実《Dark Oval》1964年
千葉市美術館蔵



千葉美術散歩 9月20日(土)-11月24日(月・祝)

中国・天津市との交流展が開催されるのにあわせて企画した展示です。千葉ゆかりの人・もの・自然の象徴をコレクションに探り、千葉を美術で散歩し巡るように紹介します。

菱川師宣《天人採蓮図》江戸時代前期 千葉市美術館蔵



第35回千葉市民美術展

3月6日(土)-3月26日(金)

市民芸術祭の一環として、千葉市美術協会会員および公募入選作品(日本画・洋画・彫刻・工芸・書道・写真・グラフィックデザイン)を展示します。

展示室で考える

作家と話し合う

私の担当は現代美術です。千葉市美術館で、私の得手とする現代美術のグループ・ショーをオーガナイズするなら、7階8階の2フロアで4,5人の作家が適当な展示になります。展覧会のサイズとしても、大体2,000平米で、疲れず、飽きず、物足りなくもない、程良い規模となります。

さてそこで構想をかためたら、出品交渉です。私の場合、まれに他館と出品交渉をしますが、主に作家との話し合いをします。

みなさん作家というのはかなりの奇人変人と思っているのではないのでしょうか。確かに自由業には会社のような縦割関係がないから、いろんな人がいるものです。でも、美術館での仕事を頼みたくない一流のアーティストには、怒りっぽい人や多少の変人はいても、サラリーマン社会に比べて特にその比率が多いとは思えません。変てこな人率、社会不適応率が高いのは、明らかに私たち美術館業界のほうでしょう。(アッ、これは失言。失礼しました。) 自己の能力で表現活動をしながら人生をおくっていかうという人に、いやな奴はさほど多くないものです。しかし作品一発、勝負の世界の人、互いに敬愛しつつ仕事を進めなければならないのは、ビジネス一般と何もかわりはありません。

美術館の任務として大切なのは、作家が極力作品に専念できるようにすることです。ビジネスの部分は基本的には美術館の役割と考えています。作家のプランが飛んでもない予算を必要とする場合、次善の策を相談することも重要です。昨春の「ジ・エッセンシャル」で渡辺好明さんは蝟蝟炎を使った大変美しい作品を制作しましたが、その前段階には消防との交渉と、書類のやりとりがありました。逢坂卓郎さんの作品プランを見積もったら、展覧会予算全額がぶっ飛んでしまいそうで、その当初プランは結局実現に至りませんでした。そんなことも珍しくはありません。作家によっては、企業から材料の提供を受けたり、助成金やアルバイトを集めたり、も美術館の仕事です。全体の資金計画は大切です。作家にもお金がなければよい作品はつくれませんし、アーティストとて露を食って生きているわけではないからです。

文芸の編集者にあたるのが、現代の作家と関わる現代美術の学芸員、と私は思っています。展覧会が出版物です。その点、古美術の場合は、交渉相手は大金持ちのコレクターや、欧州の老舗博物館だったりするのですが、見ていると、交渉相手をたて、相手のために奔走するのはおなじではないか、という感じがします。

半田滋男(元千葉市美術館学芸員、和光大学助教授)

「美術館ニュース」編集担当より

本号より編集担当が変わりました。皆様からご支持をいただいているこれまでの編集方針を引き継ぎ、一層充実した内容となるよう努めてまいりますと存じます。

今年度の美術館の目標の一つに、「子供達を美術館へ!」ということがあります。日頃から子供達の姿が展示室にあまり見られないことをさびしく思っておりました。子供達が美術に親しんでくれるように、次世代に確実に「美しさ」を伝えられるように、小・中学校への働きかけをするなど試行錯誤中です。読者の皆様からのご意見もお待ちしております。

お詫び

C'n 25号表紙および表紙裏の《牧童図》(上田耕冲筆 クラーク財団所蔵)の写りが裏焼きされておりました。深くお詫び申し上げます。訂正させていただきます。

お知らせ

美術館メールアドレスが変更となりました。

新しいメールアドレスは

artmuseum@dream.com

です。ご意見等お待ちしております。

千葉市美術館

お問合せ：043-221-2311 ホームページ：http://www.city.chiba.jp/art

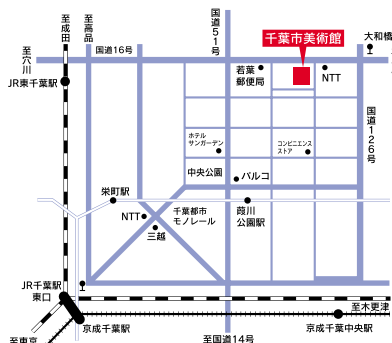
JR千葉駅東口より

徒歩約15分

バスのりば⑦より京成バス「大和橋」下車徒歩2分

千葉都市モノレール県庁前行「葭川公園」下車徒歩5分

京成電鉄千葉中央駅東口より徒歩約10分



【編集・発行】千葉市美術館 〒260-8733 千葉県千葉市中央区中央3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chiba 260-8733 Japan

【発行日】2003年5月15日

【制作・印刷】株式会社プリンテックメディア